早稲田大学歴史館開館記念企画展

東京専門学校に集った学生たち

―在野精神の源流―

表紙写真

東京専門学校第1回卒業記念 全校生徒と講師たち

1884（明治17）年7月26日

第１回卒業式当日、グリーンハウスの前で撮られたもの。校舎入口付近に大隈重信・小野梓・高田早苗の姿がみえる。片側の肩を突き出した壮士風の立ち方など、当時の学生の気風を垣間見ることができる。

最初の校舎（グリーンハウス）の一部

表紙の写真に写っている校舎は、エントランスの屋根や窓枠をエメラルドグリーンに塗装したことからグリーンハウスと呼ばれた。左の部材はその一部である。グリーンハウスは昭和初期に東伏見運動場に移築され、運動部の合宿所として使用されたが、老朽化のため1988年に解体された。その後、1992年、追分校地に復元新築された。

復元されたグリーンハウスのエントランス

左の部材は、エントランス屋根中央の突起部にあたる。

ごあいさつ

早稲田大学には、現在、約5万人の多種多様な学生（大学院生を含む）が在籍しています。しかし、1882（明治15）年10月、早稲田大学の前身、東京専門学校が開校した時、入学登録者の数はわずか80人に過ぎませんでした。当時の教育事情において、これを多いとみるか少ないとみるかは一概にいえませんが、今日の早稲田大学が、創立当初とは比較にならないほどの規模と、多様な内実を備えるに至っていることは間違いありません。

しかし、規模や形は変わっても、変わらず受け継がれているものがあります。「学問の独立」という理念、「在野の精神」を尊ぶ気風、これらは創立以来、早稲田大学が培ってきた校風――早稲田が早稲田であるゆえん――として、学外にまで広く知れわたっています。

「学問の独立」は、創立の日、小野梓によって唱えられました。建学理念のおおもとは、小野をはじめとする建学の担い手たちの思想にあります。

しかし、理念はそのままでは校風にはなりません。それに感化され、共鳴し、行動する学生の存在があってはじめて、建学の理念は早稲田大学の「校風」として、目に見えるかたちをもったのです。学生をみずして大学の歴史を語ることはできません。

早稲田大学歴史館の開館にあたり、本展示会では、創立期の学生たちに注目し、その思想と活動に迫ります。明治十四年の政変の翌年、政府を追われた大隈重信の庇護のもとで産声をあげた東京専門学校は、当初、「謀反人の学校」「立憲改進党の党員養成所」として政府から警戒され、さまざまな苦難に遭遇しました。その学校をあえて選び、門を叩いた学生たち――彼らは、早稲田で何を学び、何をなし、何者になっていったのでしょうか。ときには提唱者の意図をも超えて、おのがじし「独立」を目指した若者たちの軌跡に触れることが、「早稲田らしさ」への理解を新たにする機会ともなれば幸いです。

最後になりましたが、本展示会の開催にあたり、ご協力をいただいた国立国会図書館憲政資料室、長岡市立中央図書館文書資料室、廣井重和氏、山田恭子氏、横山真一氏ほか、関係機関、各位に、あらためて御礼を申し上げます。

2018年3月　早稲田大学大学史資料センター

所長　大日方 純夫

1 若者たちは早稲田をめざす ——東京専門学校の理念と教育

1881（明治14）年10月、いわゆる明治十四年の政変で、大隈重信と、その系列にあった官僚たちは政府を追われた。イギリス型の立憲主義国家を早急に打ち立てようとする大隈派の政治構想が、他の政府高官から危険視されたことがその背景にあった。以後、政府の方針は強力な君主権を保持するドイツ型国家の構築へと傾いて行き、大隈たちは野に在って政党政治の道筋を模索することになる。

翌1882年、大隈たちは自らの理念を実現するための二つの組織を設立する。立憲改進党と東京専門学校である。この内、東京専門学校の創立を担ったのは、大隈の右腕として行動をともにした新進の知識人・小野梓と、高田早苗・天野為之ら小野を慕い集った東京大学出身の若者たちだった。

「学問の独立」の理念のもと、東京専門学校では日本語による速成教育（当時の高等教育は、一般に外国語で行われていた）と、政治党派に偏らない科学としての専門学に基づいた教育が目指された。学生のうち、ある者は欧米の最新の知識を日本語で学べることに、ある者は双生児ともみなした立憲改進党の主張に、ある者は政治に従属しない自治・独立の気風に魅せられて、東京専門学校の門をくぐったのである。

官僚時代の大隈重信

小野梓肖像（岡吉枝 画）
早稲田大学會津八一記念博物館所蔵

大隈重信と小野梓

明治維新後、大隈重信（1838〜1922）は参議・大蔵卿などの地位にあって、欧米流の近代化政策を強力に推進していた。政策実現のため、大隈は欧米の思想・文物に精通した人材を積極的に登用した。そこに現れたのが、留学帰りの俊英・小野梓（1852〜1886）であった。米・英で吸収した近代的な立憲主義を、日本で実現する宿願をもちながら、藩閥の壁に阻まれていた小野は、大隈のブレーンとなる道に自らの理想を賭けた。明治十四年の政変後、大隈と行動をともにした小野は、立憲改進党と東京専門学校の設立準備に邁進する。政府の方針とは異なるもう一つの近代を目指して、東京専門学校は船出した。

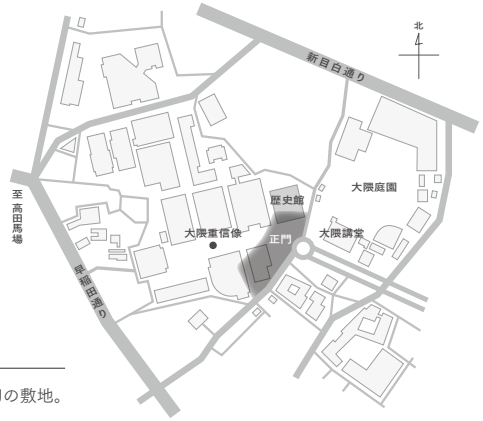
東京大学卒業記念写真

1882（明治15）年7月

1882(明治15)年の東京大学の卒業写真。2列目、一番左に山田一郎、その右隣に高田早苗。三列目、左から三人目・山田喜之助、四人目・岡山兼吉。小野梓のもと鷗渡会を結成した彼らは、三か月後には東京専門学校の教壇に立つことになる。

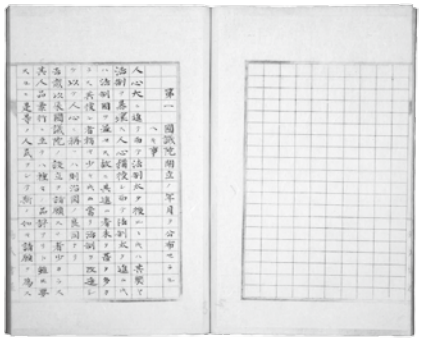
初期の東京専門学校校地

開校当初の東京専門学校の敷地は、現在の早稲田キャンパスの1号館・2号館一帯というごく狭い範囲に限られていた。



現在のキャンパス

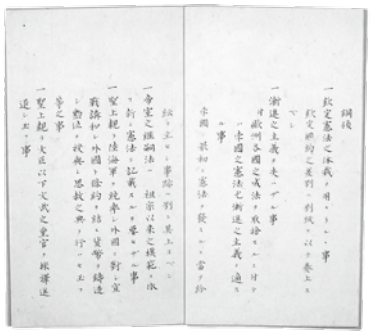
グレーの部分が開校当初の敷地。



前島密写「大隈参議国会開設建議」

早稲田大学図書館所蔵

明治政府の参議たちは、各々憲法意見書を上呈することになったため、大隈も1881（明治14）年3月、自身の意見書を提出した。これはその写しである。ここで大隈はイギリスを模範とする政党内閣制の導入、翌年の憲法制定と2年後の国会開設などを主張した。当時の政府部内にあって急進的な大隈の政治構想が、明治十四年の政変で大隈が政府を追われる遠因となった。

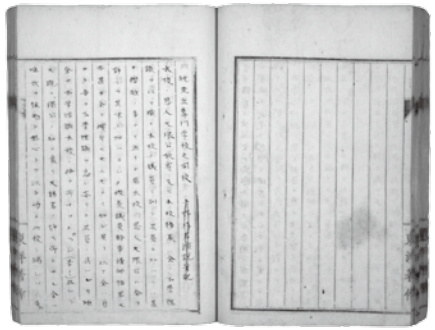


井上毅「憲法中綱領之議」

1881（明治14）年

国立国会図書館憲政資料室所蔵

右大臣・岩倉具視の憲法意見書を箇条書きで記したもの。太政官大書記官・井上毅の起草とされる。欽定憲法、議会と距離を置いた内閣制度など、ドイツをモデルとする君主権の強い憲法を目指しており、その後の憲法起草の既定路線となった。明治十四年の政変の結果、政府内部ではドイツ型の国家構想が支配的となり、それまで英米流の学問を教授していた東京大学（1886年より帝国大学）でも、ドイツ学が主流となっていった。

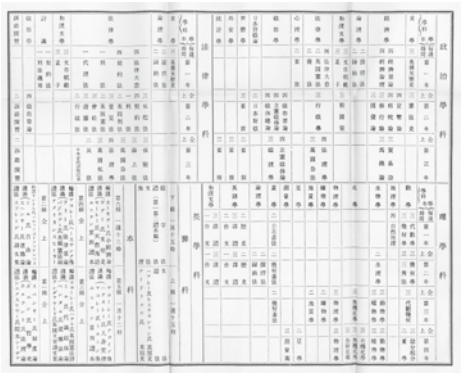


小野梓「祝東京専門学校之開校」

1882（明治15）年

早稲田大学図書館所蔵

1882（明治15）年10月21日の開校式での小野の祝辞。ここで小野が宣言した「学問の独立」には、外国の学問からの日本の学問の独立、政治からの学校の独立という二つの意味が含まれ、独立・自治の気風を持つ国民の育成を目指した東京専門学校の根本理念となった。



最初のカリキュラム《複製》

1882（明治15）年

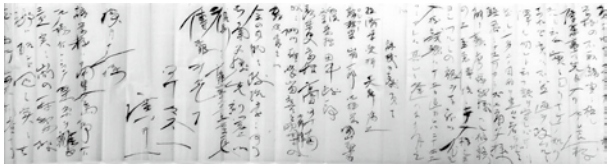
授業は第一学期（9月～2月）、第二学期（3月～7月）の二学期制となっており、カリキュラムは第一年度には基礎的な科目を多く配し、進級するにしたがい専門的な科目が多くなるように組まれていた。なお、創設時の学科の内、理学科は教員・学生の不足から1885（明治18）年に廃止されている。

天野為之の講義風景

1909（明治42）年頃

シェークスピアを講ずる坪内雄蔵（逍遙）

1909（明治42）年頃



廣井十三宛廣井一書簡

1882（明治15）年11月14日

廣井重和氏所蔵

廣井一（はじめ）（1885年政経卒）が父親に宛てた書簡。日本語で行われる講義の利点や、新築の洋風校舎の美しさなど、東京専門学校の魅力を記している。

《前略》

東京専門学校ハ諸々ノ書籍ノ善ナル処ヲ取リ之ヲ大学校卒業生講義ス、生徒ハ之ヲ筆ニテ書取ルナリ、御尊父モ御承知之通リ読ムヨリ書クハ心ニ記憶スルナリ、而シテ此学校モ二三年ニテ卒業スレハ学ビ得タル者ハ不残覚ヘテ居ルナリ、且学校ニ於テモ洋学テモ学バント欲セバ英書科モ立テ居レバ二時間位ヘハ習フコトモ出キルナリ、余リ欽慕ニ堪ズ、因テ昨日川上君ト同校ヘ参リ候処、家屋及講堂・生徒の室等実ニ美麗なリ、家屋ハ西洋造リニシテ講堂のアル家屋ハ長岡警察署位ナリ、寄宿室モ之ニ同シ目今七八十名位ニシテ、只今ニテモ試験之上入学ヲ許ス由、川上君モ慶応義塾ヲ辞シ入校スル由、実ニ目今の時勢ニ適シタル者ト考フ御尊父様の考思如何ニアリ候哉

《中略》

該校の教員は

経済学受持　天野為之

論理学（ロジック）　山田一郎

法律学　岡山兼吉

和漢文学受持　田中政郎

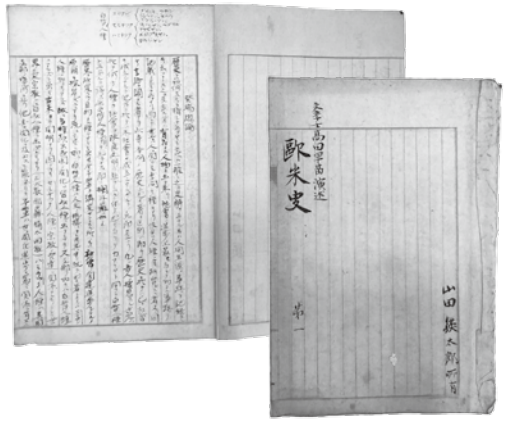
欧米史受持　高田早苗

処々砂川雄峻・山田喜之助・小野梓等の教氏有之候（ママ）

余の目的は政治学ニアリ、御尊父様先刻差上候規則を熟覧之上至急伝報ヲ乞フ、早々不一

広井十三様　　広井　一

該学校ハ南豊島郡下戸塚村ト云テ東京ヲ離る三里実ニ山間の一村、我ガ故郷ハ殆ンド同シ実ニ生徒の品行上の大利益アリ



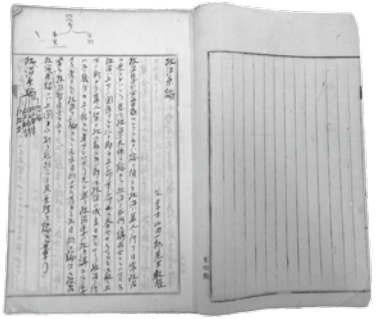
山田英太郎筆記ノート　高田早苗「欧米史」第一
1882（明治15）年10月21日～1883（明治16）年1月23日

山田英太郎（1885年政経卒）が筆記した創立当初の高田早苗（1860～1938）による講義の受講ノート。第一学期に古代史・中世史を、第二学期に近代史（特にイギリス史）を講じた。東京専門学校の教育の特色は、学問の概念を社会に基礎づけて定義し、学理と実際問題との密着を説くところにあった。そのため、社会の慣習やその変遷を学ぶ歴史教育が、政治学・経済学・法律学の前提として重視された。

山田英太郎筆記ノート
天野為之「経済原論」全

廣井一筆記ノート　天野為之「経済学」巻之一
1882（明治15）年12月
廣井重和氏所蔵

経済系の科目は、主に天野為之（1861～1938）が担当した。「経済原論」で天野は経済学を社会を単位に富の生産・分配・交易の法則を研究する学問と定義している。天野はイギリス古典派経済学の成果に依りつつ、日本ではあまり知られていなかったドイツ歴史学派の学説にも触れ、歴史的事実を重視しつつも普遍的な経済法則を探求することを目指した。この講義内容は、1886年、冨山房から出版され、日本語による最初の体系的な経済原論としてベストセラーとなった。



廣井一筆記ノート　山田一郎「政治原論」
廣井重和氏所蔵

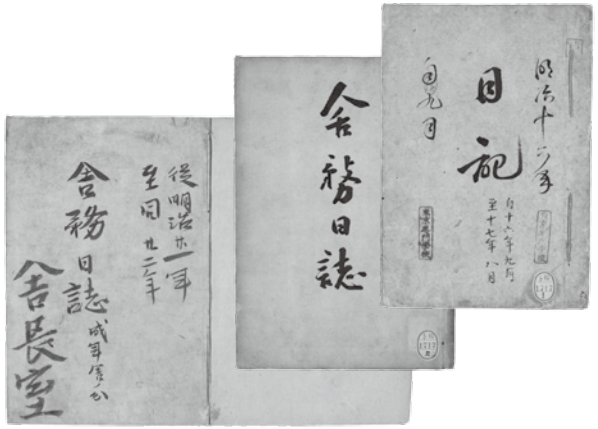
山田一郎（1860～1905）は英米流の政治学説を参考に、国家も社会の一部ととらえ、「政治ハ社会ノ一業務」とみなす立場から、ドイツ国家学とは異なる独自の政治学を構想した。社会と国家をつなぐ政党の役割を重視し、イギリス流の議院内閣制の必要性を強調した山田の議論は、近代日本における政党論の先駆としても、高く評価されている。

J.W.Gilbart “THE HISTORY, PRINCIPLES, AND PRACTICE OF BANKING”
1882年
W.Bagehot “LOMBARD STREET : a description of the money market”
1873年
H.D.Macleod “The ELEMENTS of BANKING”
1876年
早稲田大学図書館所蔵

天野為之「銀行論」で指定された参考書の一部。教場では日本語による速成教育を行う一方、原書で欧米の最新知識を深めることも推奨された。

東京専門学校の日誌
1883（明治16）年9月～1884（明治17）年8月
早稲田大学図書館所蔵

寄宿舎生の出入、教員・学生の動静、入学試験や学校行事の模様など校内の日々の出来事が記録されている。



廣井一の卒業論文
1885（明治18）年6月2日
廣井重和氏所蔵

「人口ノ原理ヲ論シテ日本ノ現状ヲ序シ救治ノ方策ニ及ブ」と題する廣井一の卒業論文。「第一章　人口之原理ヲ論ズ」「第二章　反対論ヲ評論ス」「第三章　日本ノ現状ヲ序ス」「第四章　救治ノ方策」の各章からなる。1885（明治18）年の5月15日に筆を起こした廣井は、6月2日にこの論文を書き終えている。

2 情熱と喧騒の早稲田 ―学生たちの活動と生活

東京専門学校全景
1890（明治23）年頃

写真中央の建物がグリーンハウス。その右奥に寄宿舎がみえる。開校から10年近くたっても学校の周りにはまだ一面の田圃が広がっていた。ある学生がいさかいのあった近所の女性を出あい頭に田圃に投げ飛ばしたという物騒な話も伝わっている。

学生の自主性を尊重することが、東京専門学校の教育の大原則だった。「学問の独立」の担い手は不規律の中から立ち上がる――授業に出なくてもとがめない。何に精を出しても構わない。相撲や撃剣（剣術）の稽古に勤しむ学生もいれば、昼夜を問わず青白い顔で学問に打ち込む学生もいた。寄宿舎では夜ごと政治談議や喧嘩沙汰が繰り広げられ、学生に嫌われた講師は弾劾の的となることも覚悟しなければならなかった。

学問的な客観性を重視する講師たちは、学生を特定の政派に誘導しようとはしなかった。しかし、学校をつつむ自由な空気は、学生たちの政治意識を自ずから自由民権派に近づけていった。政治的中立性を意味した「学問の独立」は、妨害や弾圧に屈しない学生たちの行動をつうじて、権力におもねらない反骨の精神へと発酵していった。

第2回卒業生と講師たち
1885（明治18）年7月26日
早稲田大学演劇博物館所蔵

下段は、右から講師の坪内雄蔵、天野為之、高田早苗、卒業生の多羅尾浩三郎（三重）、漆畑元吉（静岡）、澤田愛作（長崎）。上段は、右から卒業生の廣井一（新潟）、川上淳一郎（新潟）、秋広淡一郎（広島）、岸小三郎（岐阜）、稗田三平（千葉）、高山圭三（福岡）。学生の中には妻帯者や地方議会に議席を有する者までおり、大学を出たての講師たちより年長の者も多かった。
※（　）内は出身地。

市島謙吉と撃剣部員
1890年代

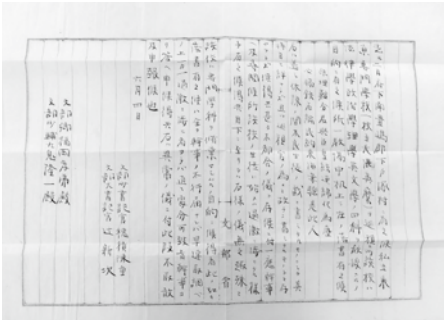
6人目が市島謙吉（1860～1944）。市島は、高田早苗らとともに鷗渡会を結成した人物。事務責任者や図書館長などを長くつとめた。

撃剣部の練習風景
1909（明治42）年頃

廣井一「東京専門学校騒動」

廣井重和氏所蔵

開校後まもない1882（明治15）年12月頃に起こった、学生同士の喧嘩沙汰を書き残したもの。日ごろから他の学生たちを馬鹿にしていた津留光三郎（法律科2年）という学生を、「数百人」の学生が追いかけまわした。結局、津留は大隈邸の庭に潜んでいるところを発見されてしまう。高田早苗や寄宿舎補幹の前橋孝義が間に立ち、憤る学生たちを長時間説得した結果、津留が真剣に謝罪することでようやく騒動はおさまったという。当時の学生たちの荒々しい気性を今に伝えるエピソードである。



校内の落書に関する文部省書記官の報告書

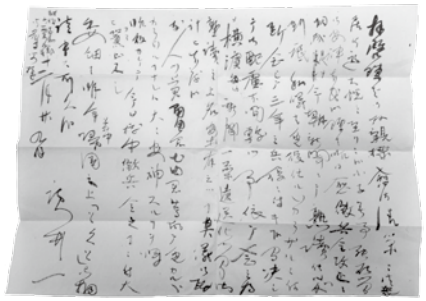
1883（明治16）年6月8日

国立公文書館所蔵

東京専門学校を巡視した文部省書記官（辻新次・穂積陳重）は、教室の机上に不穏な落書きがあるのを目にした。

「原理難分君与臣　皇統連綿化為塵　心腸鉄石論民約　東海婁騒是此人」

学問的な原理をつきつめれば君主も臣下も違いはない。皇統の永続性など塵に等しいものだ――「東洋の婁騒（ルソー）」に名を借りた激烈なアジテーションに、当時、高まりをみせていた自由民権運動の色濃い影響をうかがうことができる。この一件は文部卿に報告され、さらに参議にまで転送された。



拝啓、陳ば御双親様愈御清栄二御起居被遊大悦之至リニ候、小子無事罷在候間御安神被下度候、陳は昨日愈徴兵令改正ニ相成是ヲ今朝新聞ニテ熟読仕候処到底私儀は免役仕ルベカラザルニ付断念シテ三年之兵役ニ付キ候間決テ御配慮被下間敷候事、依テ念之為メ横浜毎日新聞一葉遞送仕候間御熟読之上名案有之候コト其儀御取計ヒ被下度候

友人川上君・角田君・土田君等凡テ免カルベカラザルコトナレハ大ニ安神スルコトヲ得、昨夜カケテ今日校中徴兵令之コトニ付大ニ震ビスシ

委細は明年暑中帰国之上「とくと」御相談申ス可く候

越後古志郡

小栗山村　十二月廿九日

広井一

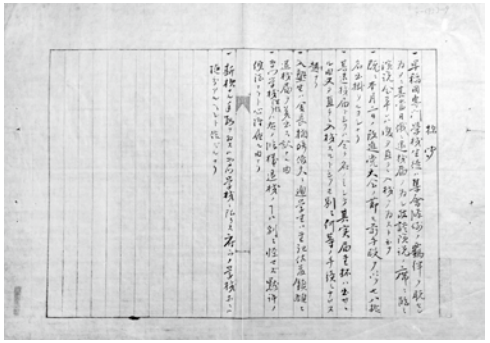
御尊父様

廣井十三宛廣井一書簡

1883（明治16）年12月29日

廣井重和氏所蔵

1883（明治16）年12月の徴兵令改正で、それまで認められていた徴兵猶予の規定がきびしくなり、東京専門学校をはじめとする各私立学校から大量の退学者が出ることになった。廣井一は、悲観的見通しとともに、この話題で校内が騒然となる様子を書き送っている。



探聞（東京専門学校生徒臨時退校ノ件）

1887（明治20）年4月4日

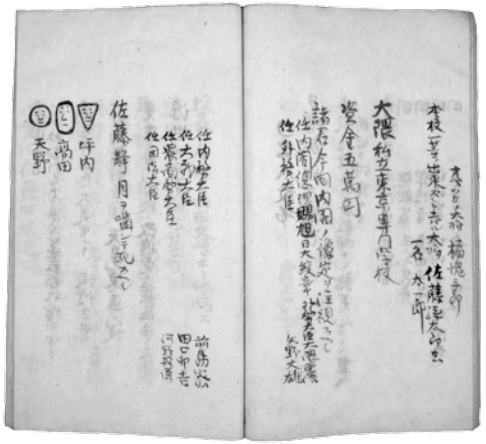
国立国会図書館憲政資料室所蔵

学内に入り込んだ政府の密偵による報告書。政談演説会を傍聴するため、学生たちが形ばかりの退校届を提出し、終了後に取り下げるという行為を繰り返していると伝えている。当時、学生の政治活動は集会条例で禁じられていたが、学生たちはこうした方法で法の目をかいくぐっていた。

高橋文質宛増田義一書翰

1891（明治24）年12月11日

邦語政治科の学生・増田義一（1893年卒）が郷里の後援者・高橋文質に宛てた書状。学内で行われる討論会の知らせや近況を書き送っている。



明治二十三年五月中旬東京専門学校壁書写

1914（大正3）年転写

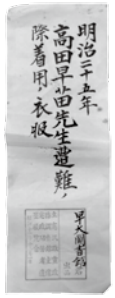
早稲田大学図書館所蔵

教室や図書室などに書かれた落書きを、校友・室井平蔵が写しとったもの。時評や教員の似顔絵などから、当時の世相や学校に対する学生たちの視線をうかがうことができる。

高田早苗遭難服箱書

1892（明治25）年の第2回総選挙は政府による激しい選挙干渉が行われたことで知られる。学校運営のかたわら衆議院議員をつとめていた高田早苗も、当選直後の5月30日、玄洋社の壮士4名に襲撃され、全治１か月の刀傷を負った。高田の遭難を知った学生たちは「警敵を討たいでどうする、学校の名折になる」といきり立ち、敵対陣営に切り込まんばかりの騒ぎとなったが、学校幹部の苦心で、なんとか事なきをえたという（増子喜一郎〈1893年邦語政治科卒〉の回想）。

※会場では遭難服を展示します。



秘密出版事件の諷刺画

1887（明治20）年
早稲田大学図書館所蔵

1887（明治20）年、内閣法律顧問ボアソナードや谷干城、板垣退助らが執筆した条約改正交渉や憲法制定に関する秘密書類が、民権派によって秘密裏に印刷・出版されるという事件が起きた。この秘密出版には東京専門学校の学生・卒業生も多数関わっており、講義中の教場に警官が踏み込んで学生を拘引する騒ぎとなった。最終的に木原勇三郎・野附常雄・今井一・奥沢福太郎らが犠牲となり、監獄に入ることで、他の多くの学生は放免された。

「下宿営業牛込区」（『TOBAE』第20号）と題するこの絵は、著名な諷刺画家・ビゴーによるもの。縛られた学生は「こんなこともうせんもん（専門）だ」と校名と掛け合わせた台詞を吐いている。

秋期大運動会の記念写真

1888（明治21）年10月10日

開校当初の運動会は、肉体的な運動だけではなく、政治的な示威運動という意味も持っていた。奇抜な扮装をし、政治スローガンを記した大旗小旗を掲げて、学生たちは運動会に熱中した。「阿世の徒を筆誅する筆」として5メートル以上もある筆を担いで参加した者まであったという。結局、警察の干渉により、数年後からは引率者が同伴する政治性のない催しとなっていった。

篠田克己日記

1886（明治19）年～1888（明治21）年

篠田克己（1889年法卒）の学生時代の日記。篠田は現在の福岡県甘木市に生まれ、後に郵便局長などをつとめた人物である。東京専門学校で行われた運動会や演説会の模様、「秘密出版事件」（文中では「印刷事件」）で校内が騒然とする様子などを克明に伝えている。

篠田克己日記より（東京専門学校に関する記述を抜粋し、現代語に訳した）

明治二十（一八八七）年

一月十二日　東京生込の早稲田にある東京専門学校に入校した。法学部に入り英学を兼修することにした。試験を要しない臨時入学なので、傍聴生の資格である。寄宿舎第二十五号に入舎した。

二月一日　振気会（校内の撃剣会）に加入した。

二十五日　晴　一年後期入校試験があり、受験した。

三月二十日　晴　午後から浅草生麦楼で法律経済演説討論会があったので聴きに行った。専門学校講師の高田早苗氏の演説があった。弁舌は爽やかで内容もしっかりしており、非常な喝采を得ていた。その他の人々も皆雄弁で、非常に盛会であった。

四月五日　晴　明六日、春期大運動会が下総小金力原で開催されるので、友人六名と午後に出発した。小金原は当校より七里余りにあり、広々とした原野で大隈氏の別宅があるところである。午後一時に出発し、上野を経て千住に出た。そこから北は道路が狭く、榎戸、戸ヶ崎を経て午後七時に流山村に到着し、加納屋に宿泊した。

六日　晴　本日は運動会の日である。当校より出発する学生百余名は、午前三時に出発して三々五々陸続と来集し、十時から十一時頃に及んだ。私は各友人と流山駅を出発して小金原に一番に到着した。総員はおよそ百三十名ばかりで、大隈氏別邸内に集まった。別邸は野原の中に入ってから半里〔約二㎞〕ほどのところにある。数棟の小屋が左右に散在し、あたかも田舎の一小集落のようである。邸内は、庭に生徒の休息所を設け、委員は前日に来て種々準備にあたり、邸内の小高いところに大旗数本を翻した。これで勢力を誇示するのである。幹事の田原栄氏、舎長の楢崎俊夫氏、そして本校委員の前島密氏が臨席した。午前十一時、一同食事をとり、邸から十町〔約一㎞〕ほどある草野に出て、種々の遊戯運動を行った。それが終わって午後三時、一同で酒宴を開いた。寡中に出た詩歌は非常に心地よく、天地を震わすようであった。そこで一同で食事をして続々と退会、また流山に集まった。船を一隻借りて総員で舟遊びをして帰る時、ちょうど日が没した。舟中で酒を飲み、食事をした。この上なく良い気分である。午前二時、舟が日本橋区蛎殻町に着いたので上陸し、学校に到着したのはほとんど四時近かった。

五月二十九日　雨　日曜。木挽町厚生館で政学講義会の演説を聞く。演説者は当専門学校講師の天野為之、高田早苗、片山清太郎の三学士であった。政学講義会は近頃発起された会で、演説会を開いたのは本日が初めてであった。満員の聴衆で非常に盛会であった。

六月一日　雨　早稲田の田はみな水が満ちて、蛙の声が騒々しい。本日は経済原論の定期試験があった。

四日　晴　午後より本校第一第二教場において同攻会の演説会があった。弁士は高田早苗、宇川盛三郎、末松謙澄の三氏であった。聴衆は、本校は勿論のこと、外来の学生も多数来ていた。前島密氏も聴衆中の別席におり、非常に盛会であった。聴衆はおよそ五百名ほどであった。

二十九日　晴　英学地理書の定期試験が行われた。昨夜、土方保次郎が死去した。同氏は筑前寄宿舎に入舎中、脚気症に罹り、二日間ばかり病臥の後、病状が非常に深刻となったため、舎生の尽力で本郷西片町十番地にある土方勝一宅に送ったのだが、病状がいよいよ深刻になり、大学の医師も匙を投げ、昨夜午後九時頃に死去した。

七月十六日　晴　試験終了と卒業生の送別を兼ねて、江東中村楼で親睦会を開催した。来会者は百十数名で、客員の主な者は、前島密、保野時中、岡山謙吉。講師では磯部四郎、高田早苗、天野為之、中橋徳五郎、片山清太郎、今井鉄太郎の諸氏、そして校長大隈秀麿氏であった。午後五時に閉会した。客員の岡山、講師の磯部、天野の演説があり、生徒中では三名が答辞を述べた。午後九時に解散した。

十月二十四日　晴　本日は専門学校の設立六周年記念日で、祝賀の為に大演説会が開催された。弁士は穂積陳重、和田桓謙三、中村忠雄の三氏で、午後三時より開会、午後五時に閉場した。終わってから、教員、講師、招待員に西洋料理の饗応がなされ。生徒一同にも振舞われた。招待員の中には大隈重信、後藤象二郎が見受けられた。

十一月二十一日　晴　当校において意見書（有名家意見書集）を印刷した件で、本校生徒の野田卯三郎がその筋に拘引された。

二十二日　晴　先の件につき、奥沢福太郎が拘引された。

二十四日　意見書の件につき、警視庁から探偵係が出張してきて、今井銀一、野村勝吉、森力之助ほか一名が拘引された。

二十六日　晴　印刷事件につき、木原勇三郎、志賀信三郎の両人が拘引され、その他に幹事と舎長、他二人の生徒が召喚され、尋問された。

二十七日　晴　この頃は、拘引事件で校内が騒がしく、いったい無事落着するのかどうか、憂うるのみである。

二十八日　晴　拘引者差入などの費用として、校内義捐金を募った。

十二月二十八日晴　保安条例発布以来、府下の旧自由党員その他滞京の壮士は条例によって目々退去させられ、その数は百に及んでいる。府下の至るところで交わされる会話で、この条例に関係しないものはない。その影響で商店の顧客は減ってしまい、一年一度の商売時だというのに非常な不景気だと聞いている。

明治二十一（一八八八）年

二月一日　晴　二月分の学費が入った書留が届いた。本日、大隈重信伯が外務大臣に任命された。

3 野に在って花開く ――早稲田を巣立った学生たち

1915（大正4）年10月の秋季中央校友大会

当日の出席者には増子喜一郎や増田義一の名もみえる。

1884（明治17）年、東京専門学校は第1回の卒業生を送り出した。最初、12名だった卒業生の数は、10年後には通算して1000名を越えるに至る。

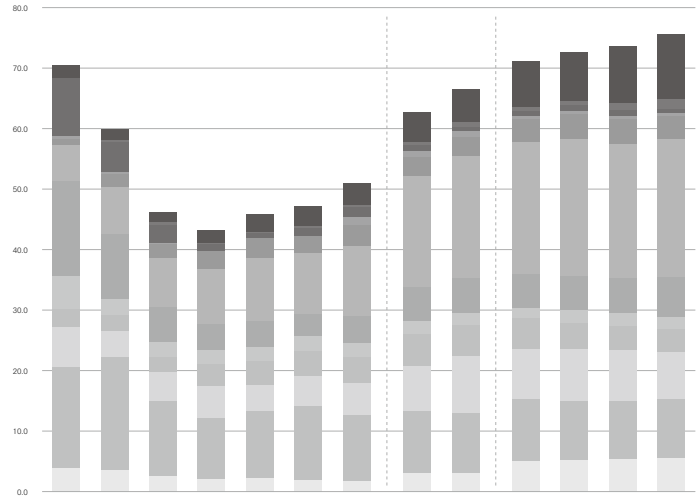
学生時代の気風そのままに、反官僚意識が強く政治志向の旺盛な卒業生たちには、新聞・出版界や政界を志す者が多く、この分野で他校の卒業生を圧倒した。やがて1890年設立の文学科からも卒業生が輩出するようになると、「政治・ジャーナリズム・文学の早稲田」という傾向が明確となり、今日までつづく大学イメージがかたちづくられた。

早稲田を巣立った後も、卒業生たちは校友として有形無形に母校を支えた。官途に背を向け、民間にあって地力を蓄えた校友たちは、やがて、政治家として、ジャーナリストとして、デモクラシーの強力な担い手となっていった。「在野の精神」を実践する校友の活躍が、新時代の青少年たちを惹きつけ、彼らの足をさらに早稲田の地へと向かわせていくことになる。

卒業年	人数	%
1884(明治17)年	12	1.1
1885(明治18)年	67	6.3
1886(明治19)年	54	5.1
1887(明治20)年	65	6.2
1888(明治21)年	55	5.2
1889(明治22)年	106	10
1890(明治23)年	185	17.5
1891(明治24)年	145	13.7
1892(明治25)年	127	12
1893(明治26)年	132	12.5
1894(明治27)年	108	10.2
合　計	1056	100

卒業者総数（1884年～1894年）

真辺将之『東京専門学校の研究』より作成



	1888年	1889年	1890年	1891年	1892年	1893年	1894年	1896年	1897年	1899年	1900年	1901年	1902年
死亡	2.0	1.7	1.5	2.0	2.9	3.3	3.5	4.8	5.4	7.5	8.0	9.4	10.7
その他	0.0	0.3	0.6	0.2	0.2	0.3	0.4	0.6	0.7	0.7	0.7	1.1	1.7
進学	9.6	5.0	2.9	1.2	0.9	1.2	1.7	0.9	0.8	0.7	0.9	0.9	0.6
軍属	0.5	0.3	0.2	0.0	0.0	0.1	1.2	1.0	0.9	0.6	0.6	0.6	0.6
農業	1.0	2.2	2.4	2.9	3.2	2.7	3.5	3.3	3.3	3.7	4.0	4.1	3.7
商工業	6.0	7.8	8.0	9.1	10.5	10.2	11.7	18.3	20.1	21.9	22.7	22.1	22.9
教育	15.7	10.6	5.9	4.4	4.2	3.7	4.4	5.5	5.7	5.6	5.7	5.9	6.5
法務	5.5	2.8	2.4	2.2	2.4	2.5	2.3	2.2	2.1	1.6	2.0	2.0	2.0
官吏(司法職)	3.0	2.5	2.4	3.8	3.9	4.2	4.4	5.3	5.1	5.2	4.3	4.0	3.9
官吏(行政職)	6.5	4.4	4.8	5.2	4.4	4.9	5.2	7.4	9.3	8.3	8.6	8.5	7.8
新聞出版	16.7	18.7	12.5	10.0	11.0	12.2	10.9	10.4	10.0	10.2	9.9	9.5	9.7
代議士	4.0	3.6	2.6	2.2	2.3	2.0	1.8	3.0	3.1	5.1	5.2	5.5	5.6
不明・無職	32.3	44.6	56.3	58.2	57.1	55.2	51.0	41.6	37.8	34.2	32.6	32.0	31.0

卒業者の職業比率（1888年～1902年）（%）

真辺将之『東京専門学校の研究』より作成

	東京法学院（現・中央大学）		明治法律学校（現・明治大学）		日本法律学校（現・日本大学）		和仏法律学校（現・法政大学）		専修学校（法学科）（現・専修大学）		獨逸学協会学校（専修科）（現・獨協大学）		東京専門学校（法律科）		東京専門学校（全学科）	
	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率
高等官	45	6.4	19	3.7	17	13.4	7	2.6	3	3.1	33	28.7	15	6.2	67	14.6
判任文官	241	34.2	84	16.2	49	38.6	84	31.2	17	17.7	49	42.6	70	28.8	43	9.4
判事検事	134	19	126	24.4	18	14.2	48	17.8	19	19.8	12	10.4	30	12.3	22	4.8
弁護士	143	20.3	190	36.8	13	10.2	66	24.5	26	27.1	2	1.7	24	9.9	4	0.9
衆議院議員	2	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	5.5
府県会議員	7	1	10	1.9	0	0	3	1.1	1	1	0	0	10	4.1	115	25.1
新聞雑誌記者	14	2	16	3.1	7	5.5	2	0.7	2	2.1	0	0	20	8.2	45	9.8
教育	7	1	3	0.6	0	0	4	1.5	5	5.2	4	3.5	14	5.8	124	27.1
銀行・会社員	96	13.6	55	10.6	23	18.1	43	16	19	19.8	12	10.4	68	28		
進路判明者計	704	100	517	100	127	100	269	100	96	100	115	100	243	100	458	100
卒業生総数	2,030		1,585		378		665		259		164		570		1,769	

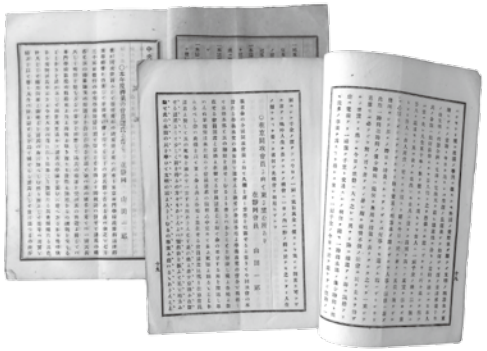
主要私立専門学校卒業者の就職状況（1897年）

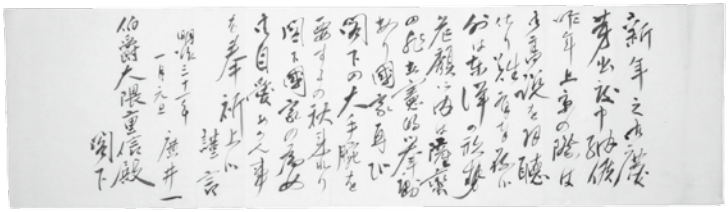
真辺将之『東京専門学校の研究』より作成

山田一郎「在京同攻会員に向て更に望む所あり」
（『中央学術雑誌』第21号）
1886（明治19）年1月

山田一郎「本年度得業の会員諸氏に告ぐ」
（『中央学術雑誌』第34、35、37号）
1886（明治19）年8～9月

講師の山田一郎は中央集権の弊害を指摘し、卒業生たちが地方にあって自治の担い手になることを期待した。しかし、学生の中央志向は強く、山田は「何故に官途に就くと地方に出るとの二者を憎むこと蛇蝎（だかつ）の如くなる哉」と嘆いている。山田自身は1885（明治18）年に講師を辞して、以後は全国各地の新聞で言論活動を繰り広げ、「天下の記者」と呼ばれるに至った。





大隈重信宛廣井一書翰
1898（明治31）年1月1日
早稲田大学図書館所蔵

郷里で言論人として重きをなしていた廣井一は、大隈重信宛の年賀状で国内外の危機を指摘し、再び国政の陣頭に立つよう大隈に促している。この年6月、日本史上初の政党内閣・第一次大隈内閣が成立する。

語り出した校友たち

時代が大正・昭和へと移り変わり、大学の姿も一変していく中で、功成り名遂げた校友たちは小野梓をはじめとする恩師たちの面影や、破天荒な自らの学生時代を懐かしく語りだした。彼らの遺した回想は、現在では、早稲田の原点を知るための貴重な手掛かりとなっている。

校友たちの肖像

山田恭子氏所蔵

山田英太郎（1862～1946）

尾張藩士の家に生まれる。知人の紹介で面会した小野梓の人格識見に心服し、1882（明治15）年、東京専門学校政治経済学科に入学。卒業後、『朝野新聞』社員や愛知県会議員を経て、成田鉄道社長、岩倉鉄道学校校長、日清生命保険会長など要職を歴任した。早稲田大学でも評議員、基金管理委員、維持員をつとめている。

廣井一（1865～1934）

越後国古志郡（現・新潟県小千谷市）の生まれ。1882（明治15）年に上京し、慶應義塾を経て東京専門学校政治経済学科に入学した。卒業後は郷里に戻り、教員をつとめる傍ら、改進党系の政治家として活動。『越佐毎日新聞』の主筆や、長岡銀行・越後鉄道会社等の創設に関わるなど、一貫して地元の政治・経済・教育の発展に尽力した。

廣井重和氏所蔵

増田義一（1869～1949）

越後国頸城郡戸狩村（現・新潟県上越市）出身。郷里の『高田新聞』で改進党系の言論活動を行い、同社の高橋文質の後援で東京専門学校に入る。卒業後、『読売新聞』を経て実業之日本社を創立、社長をつとめた。『実業之日本』『婦人世界』等々、多くの雑誌の発行を手掛け、大日本印刷などの創立にも関わる。その一方、1912（明治45）年から8期にわたり衆議院議員をつとめ、政財界で重きをなした。早稲田大学でも募金委員・維持員・理事などを歴任し、母校の発展に貢献した。

早稲田大学歴史館開館記念企画展

「 東京専門学校に集った学生たち ―在野精神の源流― 」

会期：2018年3月20日(火)～4月22日(日)

時間：10時～17時

会場：早稲田大学歴史館企画展示ルーム

※本図録に掲載した写真・資料は、展示会場に陳列したものの一部です。展示期間中、資料を差し替えることがあります。

※所蔵先が記されていない展示資料は、早稲田大学大学史資料センター所蔵です。

発行：2018年3月20日

早稲田大学大学史資料センター　Waseda University Archives

〒202-0021 東京都西東京市東伏見 3-4-1 東伏見STEP22

TEL：042-451-1343　　FAX：042-451-1347

URL：www.waseda.jp/culture/archives/

©2018 Waseda University Archives　不許複製　非売品